

タイトル：2021年度 教育セミナー（第17回）

日時：2021年9月16日（木）～19日（日）

オンライン開催

「トルコ共和国成立期における労働運動の性格と労働者の政治文化—オリエント鉄道争議を事例に」

伊藤匠平（東京大学総合文化研究科修士課程2年）

まず、昨年度に続き、今年も本セミナーに参加させていただいたことについて、心からのお礼を申し上げます。コロナ禍ということもあり、昨年と同様に zoom 開催という形になってしまいましたが、今回のセミナーから得られることは大きかったです。今年度のセミナーでは、講師の方々や筆者を含める受講生の専門が全体として歴史学分野に傾いていましたが、様々な学問や地域を専攻する人々との交流、発表・講義での質疑応答は、筆者の中東・イスラーム地域や学問に対する見方の刷新につながったと考えています。

今回のセミナーの中でも、特に、イラン近現代史を専門とする八尾師誠先生の地域研究に関する講義は興味深く、刺激的なものでした。八尾師先生が、文献資料を重視する歴史学も含める地域研究において、リアリティなどを知るために現地に足を運び調査する重要性を説いておられた点は印象深かったものです。現在の状況では、海外に訪問、留学することは難しいですが、八尾師先生のお話を聞いて、筆者が専門の地域とするトルコやその周辺地域に足を踏み入れたいという衝動に駆られました。

また、オスマン朝期アナトリア南東部の歴史を研究テーマとする齋藤久美子先生による、ご自身の研究人生も含めての講義も印象に残りました。先述した八尾師先生のお話と関連して、齋藤先生の講義から、史料中に出てくる建築物や土地などを確認するために、現地に赴いてその実像や様子を見る必要性や意義を理解することができ、歴史研究者といえども、やはり実地調査を行わなければならないと感じました。

以上の点に加えて、筆者が本セミナーで報告を行う機会を得られ、参加者の方々から重要、かつ鋭い指摘を頂けたことは幸甚です。特に、トルコ人、ムスリム、非ムスリムといった分析概念を巡ってのコメントを受けて、その分析概念を再整理・定義する必要性を感じました。本セミナーでの報告に対するコメントを、修士論文の執筆や今後の発表等に反映させるよう心がけたいです。

セミナー後の、zoom を用いたオンライン懇親会における先生方や他の受講生の方々との交流も価値ある機会となりました。コロナ禍によって他の大学院生や先生方との交流が遮られる状況にあって、今回のようなオンライン懇親会はまさに僥倖でした。懇親に加えて、情報交換の場として機能していたように、多くの有意義な情報を得ることができました。例えば、熊倉和歌子先生から、デジタル・ヒューマニティーズの研究動向や教科書等に関する情報、デジタル・マッピングの方法をご教授いただいた点はたいへん有意義でし

た。

最後に、今回のセミナー、そして、講師・受講生の方々との交流を通じ、中東・イスラーム地域研究は、多様な国・地域や学問分野を専攻する人々から成り立っているという認識を改めて確認することができました。去年と同様に、対面でのセミナー開催が制限される厳しい状況の中、オンライン開催という形で4日間の教育セミナーを開催いただいたアジア・アフリカ言語文化研究所の皆様に、再度お礼を申し上げます。